

離婚をめぐる女性と子供

——西独・マールブルクの女たち

宝福則子

フランクフルトから北へ汽車で一時間、一九六〇年代後半から七〇年代にかけて、ベルリン自由大学と並んで学生運動の拠点となったマールブルク大学がある。人口六万の大半を大学関係者が占めており、俗に「赤い孤島」と呼ばれる町である。その小地方都市マールブルク滞在十一年間を通して、私が出会い親しくつき合った女たちの話をしたい。

彼女たちのほとんどは、インテリと呼ばれる種族に属していた。そして直接的間接的に、何らかの形で過去の学生運動に影響を受けた生き方をしており、さらにほとんどが法的、または実質的な離婚経験者だった。本来に、まわりを見廻していわゆる「まじめ」な市民として「幸福」な家庭生活を送っている女は誰かな、と考えなければ思い浮かばないくらい、女たちはそれぞれに自由な生き方をしていった。

結婚生活を解消するときにはインシアチブをとるのは、たいてい女性の側であった。その決断を可能にするのは、彼女たちが教師や医師等の資格を持ち、経済的自立への見通しを持っていたこともあるが、加えて法的な保障の存在もまた大きい。離婚に際しては男女それぞれが弁護士をたてて裁判所を通さなければならないが、夫婦の共同財産は二分分され、経済的に弱者の立場にある側が自立できるまでの扶養が、強者の側に義務つけられている。

子どもがいて、その父親がまだ学生で生活能力がない場合は、市の社会局から部屋代プラス一日十マルク（約千円）が母親に支給される。さらに子どものベッドや乳母車、衣類等の領収証を提出するとその金額も支払われる。

子どもの養育権をめぐる争いもあるが、しかしどちらが子どもを引きとっても、離婚後お互いに連絡をとって、

子どもの保育、教育に協力しあうのが通例である。また、子どもと別れた側の親が、一年のうち数週間、子どもとともに過ごす権利が法的に保障されている。両親の離婚が子どもにも決定的な不利益をもたらさないための配慮が、きまこまかになされている。

さらに日常生活の面でも、働く母たちや離婚した親子が支障なく暮してゆける仕組みがある。中でも「キンダーグループ（子どもグループ）」という共同育児運動の功績が大きい。これは学生運動の中から生まれ、波が去ったのちも社会に根づき、女性解放運動とのからみでも大きな役割を果たすと私はみている。多くは五、六人の子どものみを単位とし、親たちに経済的余裕のある場合は、共同で教育学専攻の学生などをアルバイト保育者として一人、二人雇う。加えて、親が一人か二人交替で保育に参加してグループの

面倒をみる。一週に一度、両親全員とアルバイト学生たちが集まり、子どもたちの行動やできごとを報告しあったり、運営の方針を話しあう。この共同保育は昼間だけだが、親が夜間または何日にもわたって家を空けなければならない

時など、グループの仲間同士、子どもを預け合っている。

こうして大人たちは、子どもたちと、自分の子他人の子の区別なく親しく接しているので、グループに長く属している子どもと大人との関係は、本当の親子のような信頼関係で成り立っている。子どもたち同士の間にも、兄弟姉妹のような関係が保たれており、その関係は彼らが成長してグループが解消したのちも続く。だからひとりっ子も事実上多くの兄弟姉妹を持っているようなもので、ひとりっ子特有の性格的マイナス面を防ぐことができる。このような大人と子どもの社会では、親と子の間の権威的な上下関係がうすく、親と子どもお互いに一個の人間同士として対等な話し方、つき合い方をする。そのひとつの表われは、子どもが自分の親をたとえば「アンナ」というように名前前で呼ぶ習慣である。

最近はいわゆる「非登録婚」が多くなっている。私の住んでいた学生寮で、昨年二人の若い学生が未婚のまま子どもを産み、どちらも出産後まもなく若い父親たちと別れてしまった。Pの場合、その理由は父親が子どもの保育や家

事をさぼるから。Mの理由は思想的不一致である。

PもMも、三十代半ばの私にとってはより若い世代である。これからの女たちはこんなふうに生きていけるのかなあ、という思いで彼女たちをみていたが、相手との人間関係をあまりに簡単に切り捨てるやり方に、割り切れないものを感じたのも事実だ。

私が共感を覚える友人のひとりとして、五十代のHの生き方を最後に紹介しよう。Hは半ユダヤ人で強制収容所の経験を持ち、戦後に結婚して二児を産んだ後離婚し、ローマでジャーナリストとして自分を鍛えあげてきた人である。四十歳代になってから大学で政治学を専攻し、BDWi

(民主学者同盟)の事務局長としてエネルギーに活躍していたが、離婚後知りあった三〇年来の「ボーイフレンド」は、アパートの同じ階に向いあわせに住んでいた。

(彼女の)前夫の妻が亡くなったとき、彼女は病弱の前夫を引き取り、病院の送り迎えや身のまわりの世話をし、二人の男性と彼女との老人三人の日常的な共同生活を送っていた。人を招くのが好きな女だったが、彼女が食事の仕度をしていると、七十六歳のボーイフレンドは彼の台所でデザート用のクリームを泡立て、お互いに開け放した扉越しに、イタリア仕込みの陽気さで大声で話しながら食事の雰囲気を作っていくのだった。